Ⅵ　子どもを虐待から守るための子どもへの関わり方

１　児童虐待を防止するための人権教育の実践

虐待は子どもの心の成長に深い傷を負わせ、将来の生き方にも大きな影響を及ぼします。虐待から子どもを守ることは、かけがえのない子どもの人権を守ることです。

児童虐待防止法第１条では、「児童虐待が著しい人権侵害である」こと、第５条第３項では、「学校は、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育または啓発に努めなければならない」ことを規定しています。

子どもたちを虐待という人権侵害から守るためには、早期発見・早期対応と併せて、子どもたちに虐待を防止するための資質・能力―自尊感情やコミュニケーション能力、人権意識等―を育成することが重要となります。

子どもたちが自分自身を大切にするとともに、自分の置かれている状況を理解して周囲の人に相談すること、話したいことを正しく伝えること、さらに不当な扱いから逃れること、そのような資質・能力を身につけさせることが、虐待の防止につながります。

そのために虐待を防止するための資質・能力を育てる人権教育の授業実践が望まれます。

実践に当たっては、事前・事後において、次のような配慮が必要となります。

①事前において

・子どもとその家庭の状況を十分に把握しておくこと。

・保護者に指導内容について知らせておくこと。

・虐待を受けたと思われる児童生徒がいる場合には、子どもが虐待されたときのことを思い出して不安になったり、精神的苦痛を受けたりしないよう、十分配慮すること。

②事後において

・保護者の愛情についてもふれ、「親にたたかれた」「きつく叱られた」等、その全てを「虐待」と決めつけてしまうことがないよう配慮する。

・虐待を受けたと思われる児童生徒がいる場合には、個別的な指導が必要となること。

また、次のような子どもがいる場合は、特に配慮して子どもが共感できる指導が必要となります。

①　家庭内のこととして秘密を守ろうとしている。

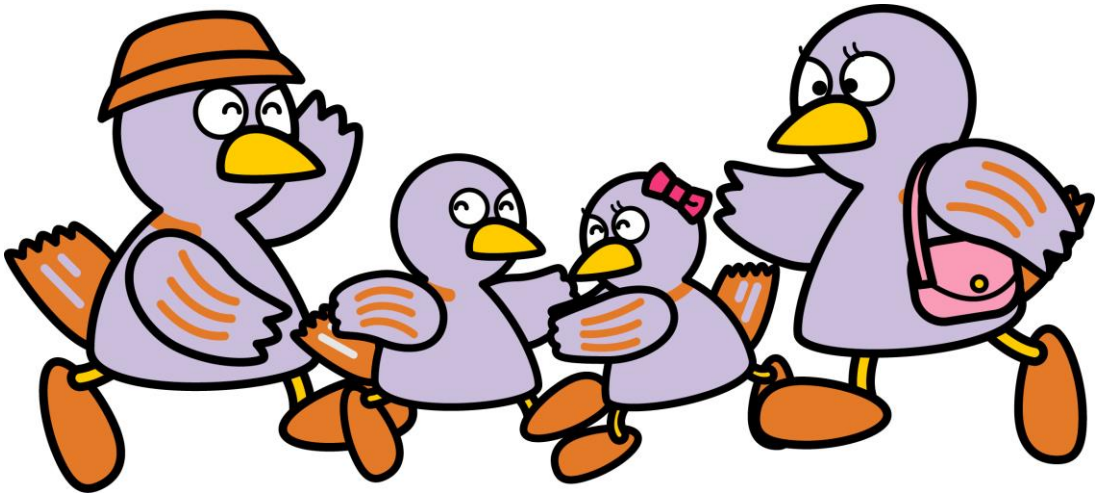
・　家庭内の出来事でも「安心していつでも聞いてもらえる」という子どもとの信頼関係を築くことが基盤となります。

②　自分に責任があると思い込んでいる

・　幼い子どもにとって親が悪いという考えを受け入れることは耐え難い不安を招き、結果として子どもは自分が悪いと考えざるを得なくなります。さらに、虐待の事実を他人に話すことは自分が悪い子であることを表明することになってしまうので、子どもは事実を隠して親をかばおうとします。

※　いかなる理由があろうとも虐待を正当化することはできないことを知らせ、明確に意思表示をすることの必要性を理解させることが大切です。

虐待の体験を子どもが自らの言葉で語ることができるようになるのは、周囲への信頼と安心を取り戻し、心の傷も癒え始めて、虐待を受けたという体験と現在の自分との間に現実的にも心理的にも距離ができてからだと考えなければなりません。それには、根気強く継続的な取組が必要です。



２　指導例（小学校中学年）

☆児童虐待防止指導上の配慮

題　材	わたしの空はにじの色
ねらい	互いに理解・信頼し合い、相手の幸せを願い、助け合いながら励まし合おうとする。

	学　習　活　動	指導上の留意点・支援
導入	課　　題 【資料】のお話をもとに、自分や友だちが、大人からいやなことをされたり、言われたりしたときに、どうすればよいのかを考えよう。	
	1　本時の学習内容について知る。 2　今までにいやだなと思ったのは、どんなときか思い出す。	・「大人」とは、自分の親も含めて考えさせる。 ・事前に、いやな思いを受けたことについてのアンケートをとっておく。 ・自分の経験を思い出させるようにする。
展開	3【資料】のお話を聞いて考える。 (1)　Ａ子ちゃんの立場になって、気持ちを考える。 ・姉や妹と違って、怒られると思った。 ・お姉ちゃんや妹と比べたりしないでほしい。 ・わたしも頑張ったんだよ。 ・わたしはお姉ちゃんたちのように、何でも上手に、しっかりとはできない。 ・いつだってわたしは、だめな子なんだ。 ・痛いよ、こわいよ、さびしいよ。 ・わたしは悪い子かもしれない。	・「まだ返してもらっていない。」とうそをついてしまい、母親に「あなたなんかいらない。」と言われた時、Ａ子はどんな気持ちだったのだろう。 ☆親は、子どものことを考え、しつけとして厳しく叱ることがあることも理解するように働きかける。 ・Ａ子自身の性格などにもふれさせ、Ａ子の気持ちに共感させる。 ・Ａ子の言いたくても言えない心の内を十分に考えさせる。 ・母親の言葉も暴力的であり、Ａ子は深い悲しみに沈んでいることを理解させる。
	(2)　いつもと違うＡ子ちゃんの日記を見てＢ子ちゃんが、ドキドキしたのはなぜか考える。 ・Ａ子ちゃんの身の上に大変なことが起きているかもしれない。 ・約束を破って先生に言ったほうがいいのか、よくわからない。 ・ずっと友だちでいられないかもしれない。	・自暴自棄や失望感でいっぱいの気持ちになりそうな様子に気づかせる。 ・家庭の中では、一人ぼっちであるＡ子の楽しみが、Ｂ子との交換日記であることをおさえる。 ・状況がただごとではないことに気づいたのは、普段からお互いを思いやっている友だち関係があるからであることに気づかせる。
	(3)　先生に言ったら、二度と交換日記はできないとどうして思ったのか考える。	・約束を守るべきか、Ａ子の状況を大人に知らせるべきか、Ｂ子の心の葛藤を理解させる。

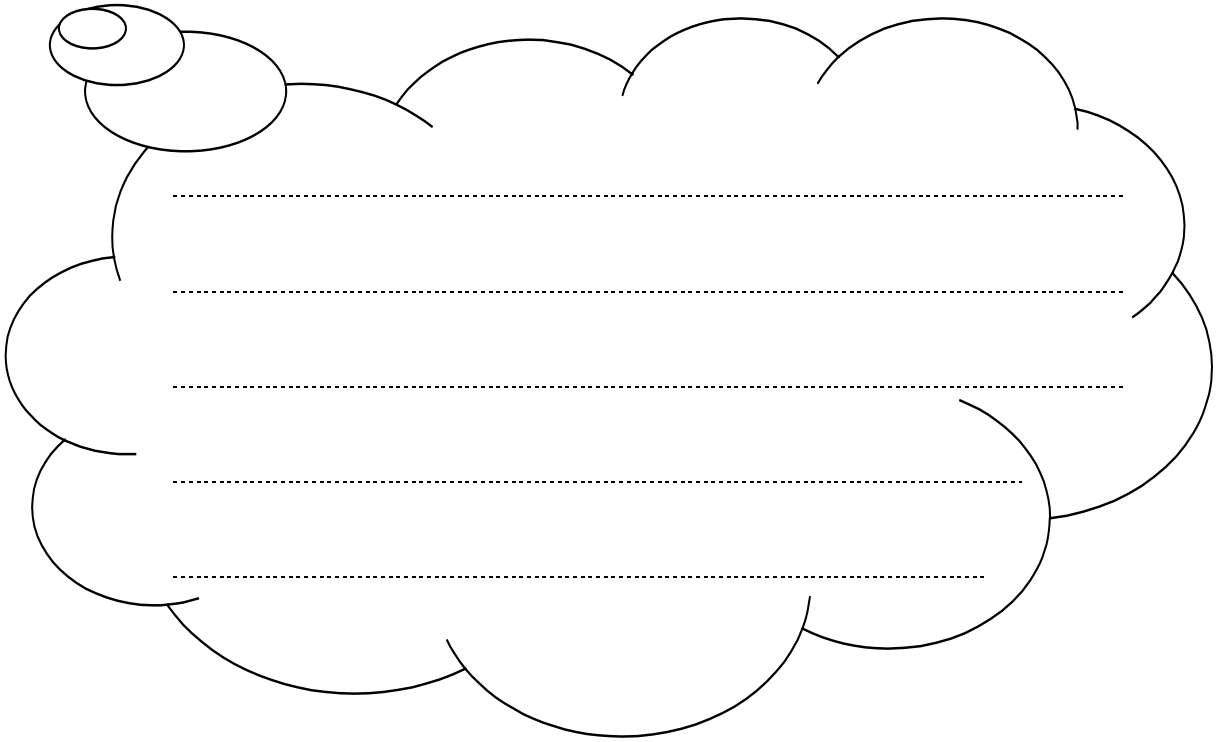
	・自分を信じて書いた友だちの秘密を先生に言ってしまった。 ・二人の秘密の交換日記を先生に言ってしまい、Ａ子ちゃんとの約束を破ってしまった。 ・Ａ子ちゃんは自分のことをとても怒っているに違いない。 ４　Ａ子ちゃんからの日記帳で「今日の私の空はにじの色よ。」と書いてあったのは、なぜか考える。 ・Ｂ子ちゃんへの友情に気づき、喜んでいるから。 ・担任の先生がお母さんに話をしてくれたので、お母さんがＡ子ちゃんにやさしくなったから。 ・自分が先生に話したことは、Ａ子ちゃんにとって良かったことなのかもしれない。 ５　学習のまとめをする。 （Ｂ子の立場） ・約束を破ってしまい、本当にごめんなさいね。でも、とっても心配をしていたんだよ。 （Ａ子の立場） ・Ｂ子ちゃんのように、お話を聞いてくれる先生もいることがわかってよかった。	・今まで信頼し合って交換日記をしていたのに、一方的に約束を破ってしまったという気持ちを理解させる。 ・自分を信じて書いてくれたことを他人に話してしまったという罪悪感などを感じ取らせるようにさせる。 ・先生に秘密を話し、約束を破ってしまったのに、Ａ子が明るく、また交換日記を書きたいというＢ子への友情に気づき、喜んでいることを理解させたい。 ・友だちを信頼し、友だちの幸せを願い、正しいと思うことを行おうとする意識をもたせる。 ☆信頼できる大人に相談することで、問題はよりよい方向に向かうということを理解させる。 ・Ｂ子やＡ子の立場になって思ったことを書かせる。 ・学校生活を続けていれば、自分のまわりには必ず気にかけてくれる友だちや先生方がいることに気づかせたい。
終末	６「心のノート」ｐ４２の「友だちがいてよかった」を読み、確認する。	・「友だちがいてよかった」は、仲間として、助け合い、励まし合い、友だち関係を築こうとすることだと確認をさせる。

・評価　お互いに理解・信頼し合い、友だちの幸せを願うことは、時には勇気をもって、正しいことを行おうと行動することでもあると理解できるか。

アンケート

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

○　おとなの人から、いやなことをされたり、言われたりしたことがありましたか。あったら、書いてください。



感想（かんそう）カード

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＜Ａちゃんに手紙を書こう＞

＜どんなことを思いましたか。＞

【資料】お話「わたしの空は、にじの色」

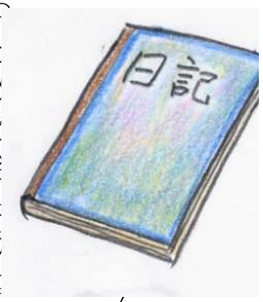
B子ちゃんは、空を見つめることが大好きです。それは、仲良しのとなりのクラスのA子ちゃんと一緒に見た、大きなにじを思い出すからです。友だちのA子ちゃんは物静かで、どちらかというと自分に言いたいことがあっても、B子ちゃんとは反対にがまんをしてしまうタイプの女の子です。

毎日、二人の交かん日記には、

「わたしの今日の空の色はね、○○色なんだ。」

とお互いに書きます。B子ちゃんは、

「A子ちゃんの空の色ってとてもすてきだね。これからもそっと教え合おうね。」



といつも返事を書きます。A子ちゃんは、そんなB子ちゃんの言葉をとてもうれしく感じ、二人だけの秘密の交換日記がいつも楽しみでした。

ある日、A子ちゃんのお母さんが夕食のしたくをしている時、お姉さんと妹が算数のテストを持って帰ってきました。そのテストを見たお母さんは、

「まあ、二人とも百点をとってきたのね。お母さんは、とてもうれしくて、鼻が高いわ。よくがんばったわね。二人ともえらいわ。」

と大喜びをしました。そして、近くにいたA子ちゃんにも、

「A子もテストが終わってるでしょう？お母さんにはやく見せなさい。」

と言いました。A子ちゃんは、実は、昨日、担任の先生から算数のテストを返してもらっていたのですが、点数が悪いために、「わたしのクラスは、まだ返してもらってないの。」と、思わずうそをついてしまいました。それをとなりで聞いていた妹に、

「あら、お姉ちゃん。それは、おかしいよ。さっきランドセルから出して机の中にしまっていたでしょう。わたし、見ていたもの。」

と、言われてしまいました。その言葉を聞くなりお母さんは、みるみる顔を赤くして、

「どうしていつもうそをつくの！かくさないでお母さんに見せなさい。」

と、すごいけんまくで言い、A子ちゃんの頭をなぐりました。A子ちゃんは、ただ、だまって下を向いていました。お母さんは、さらにこわい顔をして、A子ちゃんの引き出しを開け、

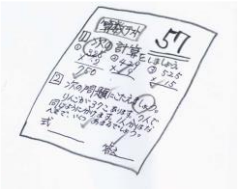
「はやく、お母さんに見せなさい。いったい、何点だったの。」

と、どなりながらA子ちゃんのテストをうばうようにつかみ取ると、

「なんてこと。また、こんなに悪い点数をとってきて。なぜ、あなたは、お姉ちゃんや妹のようにできないの。しっかりと勉強しなくてはだめじゃないの。」

と、何度も何度もA子ちゃんの頭をたたきながら言いました。A子ちゃんのお姉さんと妹は、だまって机に向かい宿題を始めました。

そして、お母さんはため息をつきながら最後にA子ちゃんに向かって、



「お父さんもお母さんも子どもの頃は、とても勉強も運動もできたのに、あなたはいったい誰に似たのかしら。あなたなんか産むんじゃなかったわ。」「あなたなんかいらない。どこにでもいってしまいなさい。」

と言って、夕食のしたくを続けました。

その日のA子ちゃんの夕食は、用意されませんでした。このようなときにはA子ちゃんは、いつも部屋のすみで、一人で空をぼんやり見つめて過ごしました。お腹がすいていましたが、しかたなく夜は、なみだをこらえて眠りました。

次の日、朝ごはんも食べずA子ちゃんは、朝一番に一人で登校しました。元気がありません。教室で、ひとりぼんやりと窓の外の空を見つめながら、一日が過ぎていきました。

「さようなら。また、明日ね。」

と元気のないA子ちゃんは、B子ちゃんに言いました。日記を渡されたB子ちゃんは、

「B子ちゃん、私の空は、今日はね、暗いねずみ色なんだ。・・・・それはね、昨日、うちのお母さんが、私のことをね、・・・・・。でも、絶対に内緒にして誰にも言わないでね。私とずっと友だちでいてね。」

というA子ちゃんの日記を読みました。B子ちゃんは、A子ちゃんがいつもと違うことに、気が付きました。A子ちゃんの様子がずっと気にかかっていたので、「どうしたのだろう、きっとA子ちゃんに何かあったのかもしれない。」と考えました。B子ちゃんは、自分の胸がドキドキし、とても痛く感じました。

「どうしたらいいのだろう。」B子ちゃんは、何度も心の中で言いました。そして、とうとう「A子ちゃん、ごめんね。でも、ずっと友だちだよ。」とつぶやきながら放課後、思い切って担任の先生にA子ちゃんの日記のことを話しました。

その後、A子ちゃんは、登校しませんでした。B子ちゃんは、A子ちゃんのことがとても心配でした。そして、二人の交換日記は、もう二度とできないかもしれないと思っていました。

しばらくたってから、担任の先生が、A子ちゃんからの二人の日記帳を渡してくれました。そこには、

「B子ちゃん、また日記を一緒に書いて、学校で交かんしようね。今日の私の空は、にじの色よ。」

というA子ちゃんのいつもの言葉が、書いてありました。

B子ちゃんは、A子ちゃんと一緒に、大きな空のにじをまた、見たいなあと思いました。

（参考「児童虐待防止指導実践事例集」埼玉県教育委員会）